

RESIDENT EVIL ? —
バイオハザード9 —

脱税文庫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1998年のラクーン事件は世界を変えた。

以来、世界に拡散した生物兵器群『B・O・W』はその猛威を振るい、安価で人に代わる運用が容易な存在として戦場を席卷することになる。

製薬企業連盟は対抗措置として対BOW部隊BSAAを設立。この悪夢を断ち切るために幾人もの兵士が戦いに身を投じ、多くの命が散っていった。

二十年にわたって骨肉の争いは続いた。この歪な均衡はやがて崩れることになる。

先進国はこの状況に疲弊していた。終わりになきテロ、生物兵器との戦いに。ニューヨークでのバイオテロを皮切りに、世界各地でテロが頻発。いかなる場所であつても安

全が保証されないことを知った世論は、自らをBOWの跳梁跋扈する世界から切り離すことを望んだ。

やがてそれは国際BOW法案という形で具現することになる。対BOW戦に国際法で禁じられていた生物兵器の使用を認可するというこの法案は、元よりBOWを研究していた製薬企業連盟と政府の癒着もあり、あっさりと世界に根づいた。

この状況に反発したのは、この二十年間BOWと戦い続けたクリスレッドフィールドからラクーン事件の被害者達である。これまで製薬企業アンブレラの負の遺産を見てきた彼にとってこの状況は製薬企業連盟の利権を満たすだけの代物でしかなく、これまでの数々の例から必ず失敗に終わると見ていた。また、かつての地獄を経験でその心の奥底に深く刻まれた傷の痛みがそれを良しとしなかった。

しかし時代は移ろいつつあった。彼の古巣であるB S A Aですらもその波に飲み込まれ、生物兵器を対テロに運用し始める。

一方製薬企業連盟は片や対テロのための生物兵器を製造し、片やテロリストに兵器を売りつけるといふ二つの顔を併せ持つことで私腹を肥やしていった。

全てに愛想が尽き果てたクリスは完全にB S A Aと縁を絶ち、世界を覆う腐敗し切った傘の影を浄化すべく同志と共に戦い続ける。

永遠にも思える闘争があつた。散華と同じに、彼に付き従う多くの儂い命は荒波の如

き運命に翻弄され、その天寿を全うすることすら叶わない。その中で、彼の運命の齒車
は再び回り始める。

そこには彼が救えなかった存在——イーサン・ウィンターズの影があつた。

かつて救えず、失われたと思われた命は未だ灯つたまま、娘の存在を求めて彷徨する。
変貌した世界で、闇より来たれり邪悪なもの達との戦争もまた、次なる時代に移ろい
行くのであつた。

目次

Chapter 1 | 1

Chapter 1

人生最悪の出来事は？と問われれば、ぼくは間違いなくあのルイジアナでの出来事だと答える。

ルイジアナ州ダルウエイ毎年ハリケーンが上陸して街を水浸しにしていくこの地域は、そのイメージ通りカビ臭い湿地帯だった。そんな地域にポツンと佇むベイカー農場での悪夢が、ぼくの人生を決定的に変えた。

ぼくがここを訪れる三年前の歴史的被害を出した嵐の夜、この地方に棲まうベイカー一家は忽然とその姿を消した。ぼくがここを訪れたのはその取材のためだった。

2017年当時、ぼくは大手動画配信サイトではちよつと名の知れた配信者だった。しかし当時のパートナーとの間に起きたいざござのせいでDVを疑われ、大炎上をかました結果これまで配信者として獲得した地位も財産も一瞬にして失われた。

それからというもの、日々の食事にも事欠く生活を送る羽目に陥ったぼくは、配信者時代にできたコネを通じて職を募った。そこでぼくに声をかけてくれたのがテレビ局のネット配信番組「スーワゲーターズ」のプロデューサーを務めるアンドレだった。醜聞のせいで粗方のコネを潰され、途方に暮れていたぼくは、彼の提示したカメラマンと

しての仕事に一も二もなく飛びついた。元より配信者としてのプライドはとつくと捨てていたし、ここから人生の再起を図るのも悪くないと思い始めていた。

そして破滅が始まった。今思えば本当にバカだったと思う。過去の自分に何か言っ
てやれることがあるとすれば、どんなピンチの中でも仕事は選べと口説くだろう。

さて、基本スローゲーターズは適当な口ケをしてフェイクを混ぜ込んだり、やらせをしたりというみみっちい番組に過ぎなかった。だからその時の廃墟化した幽霊屋敷の調査という、今時配信者でもやらないような下らない内容に呆れていたのも、適当に済ませよう、そう思っていた。

メンバーはぼく、アンドレ、そしてニュースキャスター気取りのピーターの三人だ。

このピーターという男は週末の代理キャスターをしていただけにもかかわらず、やたらとぼくやアンドレに対して傲慢に接して来た。彼は特に、配信者としてそこそこ名の知れたぼくに何かとライバル意識を抱いていたらしく、撮影中しよっちゅうぼくのカメラを揺らしてきた。そのせいで音声拾いきれずアテレコになったのも今となっては懐かしい。

さて、ベイカー邸に赴いたぼくら三人はやや揉めつつも撮影を開始した。最中、この家の元住人の詳細や失踪した経緯などを語っていたアンドレが唐突に姿を消した。邸内を探し回り、やがてやたらと凝った仕掛けの隠し部屋の奥でアンドレは死体となって

発見された。

第一発見者はぼくだった。隠し部屋に通じる梯子の下で彼は口に金属パイプを突っ込まれて惨殺されていた。おまけにそれがぼくの方へと倒れてきたものだからぼくは半狂乱で騒ぎ立て、次いで現れた謎の大男に顔面を殴打されて気を失った。

目が覚めると、キッチンと思しき別の部屋に拘束されていた。ピーターも同じく捕まっており、やばいことに巻き込まれたのを察したぼくたち二人は早急に脱出を目指して行動を開始した。ピーターは床に落ちていた包丁でぼくの手首の結束バンドを解こうとした。しかしその最中、彼の背後からいきなり現れた狂人女が彼を刺し貫いたのである。

さつきぼくはピーターはキャスター気取りの傲慢な奴だと言っけれどもそれは訂正しなければならぬようだ。謎の女の登場にぼくが半分漏らしながら喚いている間、彼は刺されたのにも関わらず果敢に女に立ち向かって行ったのである。今まで可哀想な奴だと見下していたのにまさかあんなに勇気のある奴だとは思わなかった。おかげでぼくの命は助かったわけだけど、その代償は彼の生首という形で支払われることになった。こちらにポイ投げされてきた彼の頭部は一生忘れられないだろう。おまけに地面を転がる頭が壮絶な表情でこちらに視線を合わせてきたものだから、後々ぼくはこの光景にずっとうなされた。

ぼくはその後女に襲われて気を失い、気がつけば寝室と思しき部屋でベッドに拘束されていた。目の前には盆に乗った異様な食事が配されていて、左手はベットに併設された食台に拘束されていた。

視界の奥の扉から老婆が入ってきた。

ぼくはその顔を見て驚愕した。その顔には見覚えがあつた。廃屋を取材していた際、至る所に見受けられた家族写真に写っていた女性だったのである。ということは彼女は失踪したと思われていたベイカー一家の一人というわけだ。

彼女はぼくにグロテスクな料理を食べるよう言い、拒否すると平手を食らわせてきた。仕方なく口に含むと命の危険を感じる味がしたので、また戻つてくると言つた老婆が部屋から去ると同時に脱出を開始した。

この寝室というのがこれまたえらく難解にして制作者の性根を疑う謎に満ちている代物で、それを解きながら何とか脱出への道筋を探り当て、物音を聞きつけて戻つてきた老婆の喉にナイフを突き立ててベッドの下の隠し扉から逃げ出した。

ひと安心か、と思いきや悪夢はまだまだ終わらない。隠し扉からの秘密の通路を通じて地下に降りたぼくは、今度はアンドレを殺したと思しき大男に遭遇する。大男——この家の主、ジャック・ベイカーはぼくの前に立ち塞がり、一晩生き残つたら逃してやると言つた。男が去つた後、壁や床、そして空気穴を通じて現れた謎の黒い化け物が襲い

かかってきた。

これがまた不快な代物で、廃液みたいな汁を垂れ流しながら蠢くカビ臭い肉塊だった。それが人の形をして硬い爪なんぞ持つてるものだから襲われたらそりやもう死にかけるわけで。あれほど死を意識した時はなかった。

とはいえこちらも黙って死ぬわけにはいかない。手近にあつた大量の銃器を駆使して——異様な改造が施されているとはいえ、ただの民家に何故こんなにも火器が配置されているのかは全く不明——叫び散らしながらそれらをぶつ放した。始めは恐怖に支配されていたけれど、その内に怒りが湧いて来てアンドレやピーターを殺した奴らの仇をとつてやろうと俄然息巻き、やがて段々敵の頭部を撃ち抜いて粉々にしてぐちゃぐちゃのそれが飛散するのが楽しくなりつつあつた。

夢中で殺しているうち、さっきの大男がハサミのような怪物チェーンソーで襲いかかってきた。こつちも半狂乱で抵抗し、全身ズタズタになりながらも辛うじて生き長らえた。

地下から脱出すると、そこは巨大な邸だということがわかった。途中黒い化け物かわししながら邸からの脱出を目指す、今度は謎の実験場に迷い込んだ。と思うと後ろから何者かに殴打されて気を失った。

気がつくときぼくは謎の部屋にいた。モニターが親の仇のように配置された狭い場所

で、作った奴の趣味の悪さが伺える。ぼくは卓の前に座らされ、左手を面妖な機械に固定されていた。そして卓を挟んで向かい側に麻袋を被せられた男が同じく左手を固定されていた。

モニターが点灯し、隈の濃い目をしたいかにもなサイコ野郎が現れた。この男こそがベイカー家の長男、ルーカス・ベイカーだった。

ルーカスはぼくらに殺人ブラックジャックを強要し、ぼくと向かいに座るホフマンという男は、左手の指をチップにこのゲームに挑むことになった。賞金はこの地獄からの解放だ。

その時ぼくは指を二本失い、ホフマンは五本だった。左手の機械には指を切断する最高に最悪な機能が搭載されていた。ホフマンが左手を更地にしたところでゲーム終了かと思いきや、その次に殺人電気ショックを食らえる第二ステージ、更にその次にスパー残虐マシンこと回転包丁ノコギリというスパーに残虐なマシンにかけられる第三ステージまで続いた。これは縦の円盤に放射状に取り付けられた包丁が回転したものが顔面に迫ってくるというもので、負けた方は実の親すら見分けられない悲惨な面に早変わりだ。もつともイケメンと醜面も大差がなくなるからある意味生来の格差を取り払ってくれる良心とも言える。

ぼくがホフマンを殺したところでやつとここからおさらばできるかと思いきや、サイ

コナルーカスが義理堅く約束を守るわけもなく、あっさりそれは反故された。ルーカスは次のお楽しみだと愉しげに笑ってぼくをふたたび気絶させ、次のゲームに誘った。

次のゲームでぼくは死んだ。文字通り焼死したのだ。

障害を乗り越え、謎を解いてバースデーケーキにロウソクを立てるだけの簡単なゲームだったけど、謎解きの過程でどうやっただって死ぬようにできていた。終わりだ。デッドエンドだ。

ロウソクをケーキに立てた瞬間、ケーキが爆破し、部屋に充満していた可燃性液体に引火した。一面炎塗れの部屋で肺を焼かれながらもがき苦しんだ。耐え難くて死にたかった。やがてその時が訪れた。暗闇に取り残された。

ホフマン以上に苦しい死に方だっただろう。地獄で彼と会ったらマウンとをとつてやろうと焼き切れる寸前の脳で考えた。

そしてぼくは死んだ。

後のことは走馬灯か、はたまた夢だったのかも知れない。現実感を完全に欠いていたからだ。

死んだ後、ぼくの中にはぼくでない何かが発生した。或いはぼくが日頃意識していなかった原初の本能というやつかもしれない。そいつがぼくの死んだ意識と切り替わるようにすつと交換され、何かの間違いでひよっこり表に顔を出した。

そいつがやったことといえれば大したことはない、すつと立ち上がって壁を幾度かバンバン叩いただけだ。あるいは脱出したかかったのかもしれない。壁には穴が空いたけど、それつきりそいつは姿を消してしまい、ぼくはただの死体に戻った。

まさかそれから目を覚まそうとは思ってもよらなかった。